

# Keiba Global Front Line

## 競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介します



### 合田 直弘

チエルトナムフェスティバル初日(3月10日)のメイン競走として行われるG1チャンピオンハードル(芝16F87㍎)へ向けた前売りで、1番人気に推されているサージーノ(馴6)が、今月のこのコラムの主役だ。

実は、昨年未まで情勢が混沌としたのが、今季のハードル2マイル路線だった。愛国におけるこの路線の第一人者で、24年のチャンピオンハードルも含めてG12勝の実績を誇るステートマン(馴9)が、屈腱炎を発症したため今季を全休することが発表されたのが、昨年11月12日のことだった。ステートマンと同世代で、21年4月から25年1月まで23年のチャンピオンハードルを含めて無敗の10連勝を達成したのち、呼吸器疾病や脚部不安に見舞われた影響で3連敗を喫していたコンステイテューションヒル(馴9)が、今季初戦となった昨年11月29日のG1ファイティングフィフスハードルで落馬。引退の瀬戸際に立つことになった。ノーヴィスチェイサーだった昨年、チエルトナムのG1バーリンピングハムノーヴィスチェイスを含めて無敗の4連勝を果たし、この路線の新興勢力として大きな期待を集めていたザニューライオン(馴7)もまた、今季初戦となったG1ファイティングフィフスハードルで落馬。この段階で、前売り1番人気に浮上したのが、

11月22日のG1モーギアナハードルを19馬身差で制していた、この路線の最強(牝馬)ロッシーマウス(牝7)だったが、同馬の関係者はその後、チエルトナムフェスティバルでは自身の3連覇がかかる牝馬限定のG1メアズハードルに向かう可能性を示唆。チャンピオンハードル戦線は、軸となる馬が不在だったのだ。この状況を一変させたのが、サージーノだった。

仏国産馬で、生産者を含むパートナーシップの所有馬として、23年4月にオートイユ競馬場でデビュー。障害未経験の3歳馬限定のハードル戦で勝利を収め、緒戦勝ちを飾ったのがサージーノだ。その後、美術商のジョー・ドネリー氏に購買され、英国の名門ニッキ・ヘンダーソン厩舎に移籍(馬主名義は夫人のマリー・ドネリーさん)した。

23/24年シーズンは3戦し、G14歳ジュヴェナイルハードルを含む無敗の3連勝。24/25年初戦のG1ファイティングフィフスハードルを制した後、シーズン途中にステイプルチェイスに転身。その初戦となったG2ウエイワードラッドノーヴィスチェイスを7.1/2馬身差で快勝し、ノーヴィスチェイサーにとつて2マイル路線の最高峰であるG1アークルチャレンジトロフィーの最有力候補となった。しかしその後、左後肢の靭帯に感

(染症)を発症。サージーノは、1年にわたる戦線離脱を余儀なくされることになった。

同馬の復帰戦となったのが、25年12月26日にケンプトンで行われたG1クリスマスハードルだった。前のシーズンの途中にステイプルチェイスに転身したサージーノだったが、ヘンダーソン調教師が同馬の復帰戦に選択したのは、ハードル戦だったのだ。

オッズ1.57倍の1番人気に推されたサージーノは、序盤2番手から3号障害の手前で先頭に立つて馬群を先導。7号障害手前からスタートした同馬は、昨季のG1チャンピオンハードル勝ち馬で、前走G1ファイティングフィフスハードルも勝つての参戦だったゴールドデンエース(牝7)に6馬身差をつける快勝。復帰戦を白星で飾るとともに、デビューからの通算成績を7戦7勝としたのだった。ファンの注目が集まったのは、サージーノが今後、どこを目指すかだった。すなわち、このままハードル路線を行くか、ステイプルチェイスに戻るのか。ヘンダーソン調教師は12月30日、サージーノの目標がG1チャンピオンハードルになることを示唆。これを受けてブックメーカー各社は、同競走へ向けた前売りで同馬を、2.25倍から2.375倍のオッズを提示し、1番人気に浮上させている。